

六月例会発表要旨

特集

遊戯と文学の力学

——将棋を視座として

【特集の趣旨】

運営委員会

文学の世界と遊戯は多様な関わりを持ち続けてきた。遊戯の中でも、文壇形成力学として、文学理念として、また政治的側面において、様々な形で文学と関わってきたものに将棋がある。本企画では、この将棋と文学の関係について近代文学研究の立場から総合的に光を当ててみる試みである。

これまでに多くの文学者が、将棋を介した交流によって文壇内の人間関係を形成してきた。たとえば幸田露伴をはじめ、『文藝春秋』周辺の『新思潮』同人や新感覚派、阿佐ヶ谷文士会、新戯作派などの作家たちは、将棋を

さす仲間として集い交流を続けていた。また、作家たちは観戦記の執筆を通じても棋界と関わっており、この流れは現代の観戦記に至るまで脈々と続いている。

文学と将棋との関わりを考えていくために、本企画では、朝吹真理子氏をお招きし、「朝吹真理子さんに聞く——盤上の理をめぐって」として、将棋と文学に関する講演（インタビュー形式）を行う。二〇一一年、「きことわ」によって第一四四回芥川賞を受賞した朝吹氏は、継続的に将棋、チェスに関心を寄せてきた。その造詣の深さから、二〇一一年に王座戦予選、本戦、二〇一五年には名人戦の観戦記を執筆している。対局する棋士の表情やしぐさを注視した朝吹氏による観戦記は、通常の観戦記とは異なり、盤上で練り広

げられていく過去・現在・未来の時間を書きとどめることに成功している。

さらに、朝吹氏は言語表現と関わるものとしても将棋をみつめ、棋譜や観戦記を読むことと、翻訳文を読むこととの相同性を指摘している。「きことわ」には、車内にチェスの棋譜をもとにした音楽が流れ、ブラインドチェスを行う場面が描き出されてもいる。遊戯を介した表現によって、言語の喚起する想像の域を拡大させていく朝吹氏に話をうかがうことで、将棋と文学の関係性について考えを深めたい。

一方、本企画の研究発表部では、近代文学において将棋が文学にどう関わってきたかを検討していく。そもそも、将棋は近代小説の構造と接続する問題をはらんでいる。たとえば、坪内逍遙『小説神髓』が「模写」を説明する上で将棋の比喩を用いたことは、意外にも注目されることの少ない事実である。その後も多くの作家が、作中に将棋を描き、文学や人生を将棋になぞらえて語っている。将棋には、一つ一つの石が無個性な囲碁とは異なり、それぞれ異なる個性を持った駒が、一回的な局面においてドラマを生み出すという特

徴がある。そのため、棋士や観戦者はそれを俯瞰して世界を把握し、そこに物語的な面白さを見出していくが、そうした将棋の枠組みを小説と通底したものと捉えることも出来る。将棋と文学の関係性を問うことによつて、近代小説の枠組みや描写理念について考える新たな視座が得られるだろう。

たとえば、織田作之助、太宰治ら新戯作派は、将棋の比喻を用いて文学論を展開したが、それにはどのような意味があったのだろうか。一方で、プロレタリア文学や戦後派においても将棋がしばしば表象されるが、それはどのような意味を持っているのだろうか。

本企画では、将棋と文学の歴史的な関係性について議論し、文学研究の新しい可能性を探りたい。

盤上の人生

—— 菊池寛と将棋

西井 弥生子

「将棋はとにかく愉快である。盤面の上で、この人生とは違った別な生活と事業がやれるからである。一手一手が新しい創造である」(菊池寛)将棋と人生『文藝春秋』一九二九(一)。盤上の人生は菊池にとつて魅力に富んだものであった。将棋との出会いは京都での孤独な学生時代に遡る。行きつけの床屋の主人から習ったことは「将棋の師」(『新小説』一九二二・一〇)等で繰り返し語られている。将棋の盤面展開を組み込んだ「石本検校」(『サンデー毎日』一九二三・一〇・一五)を発表した頃には、高段者の指導も受け、自らの棋力の向上を盛んに宣伝するようになり、文壇の大御所菊池寛の将棋の強さは広く知られるところとなった。

だが、将棋への強い関心は、菊池の個人的な趣味の域にとどまるものではなかった。岡本嗣郎『孤高の棋士 坂田三吉伝』(二〇〇〇

・三、集英社)によれば、将棋は新聞小説と同様に「新聞の大衆化とともに、新聞の販売政策に欠かせぬ娯楽」として出発し、「いかかわしい賭け事からぬけ出て、文化の一ジャンルとして社会に認知」されていった。このような棋譜や観戦記のメディア戦略性を見落としてはならない。『文藝春秋』誌上においても「勝継将棋」や「文壇将棋」といった独自企画がなされるようになる。菊池自身も豊富な人脈を駆使して名人戦をはじめとする対局に同席し、観戦記を記している。芥川賞・直木賞が創設された一九三五年は折しも棋界に実力名人制が導入された年でもある。菊池は念願であった坂田三吉の名人戦参加を取り持った。また、一九三七年に創刊された『将棋世界』(博文館)に寄稿し、棋道報国会に助言をする等、棋界の後援者としての役割を担うようになる。

本発表では、一九二〇年代から三〇年代にかけて大衆文化を牽引した菊池寛という存在から将棋と文学との関わりを考察する。棋譜や観戦記から立ち現れる盤上の人生とは、如何なるものであったのかを探ってみたい。

方法としての坂田三吉

——織田作之助の作品と将棋

齋藤 理 生

織田作之助は将棋を好んだ。文壇きつての将棋通だった藤沢桓夫をはじめ、親交のあった人々の回想にも将棋に親しむ織田の姿よく語られる。敗戦直後には、新聞社の企画で月形龍之介と対局し、「自戦記」や棋譜が掲載されたこともある（「大阪日日新聞」一九四六・七・三一〜八・一〇）。新聞社の予告では「強引無類の指し口を誇る」と紹介されていた織田だが、実戦では月形の悪手に乗じた手堅い寄せで勝利を収めた。映画『宮本武蔵』（一九四〇）で佐々木小次郎を演じた月形を相手に大幅な遅刻をして対局に臨んだ、という演出も含めて、作家の素顔を物語る逸話と言えよう。ただ、この発表ではより創作の内実と関わる議論をしたい。

織田は作品にしばしば将棋を用いた。たとえば『合駒富士』（一九四二）のような詰将棋に隠された謎を追う時代小説があるし、

『雨』（一九三九）や『六白金星』（一九四六）

でも、登場人物たちの自尊心を刺激する小道具として将棋が使われている。もともと、そのような将棋の使い方をした作家は他にも多くいるにちがいない。織田の特徴は、創作の方法と将棋とを密に絡ませた表現があることである。世に知られるきっかけとなった『夫婦善哉』（一九四〇）の文藝賞受賞の「感想」で「白玉側の端の歩を突いたやうな小説」と述べたことに始まり、晩年の評論「二流文楽論」（一九四六）では「一流」という言葉を対象化するうえで木村義雄や升田幸三に言及した。絶筆となった「可能性の文学」（一九四六）でも、坂田三吉の「端の歩突き」を文壇における「定跡へのアンチテーゼ」の必要を語る導入とした。

棋士・棋譜・指手など、将棋にまつわる叙述は織田の作品でどのような働きをしているだろうか。本発表ではこのことを、特に坂田三吉の語り方に注目することで明らかにしたい。具体的には前述の評論や『聴雨』『勝負師』（共に一九四三）といった小説を分析する。

遊戯的なものと反語的批評

——将棋からみる「戦後文学」状況——

木村 政 樹

従来「戦後文学の出発点」とみなされてきた野間宏の小説「暗い絵」には、将棋盤を囲む学生が登場する。主人公深見進介はかれらに向かつて、「革命家諸君といふ嘲笑の言葉」を投げつける。このくだりには、将棋という遊戯的なものと革命主体の理想像をめぐる屈折した関係が、文学表現を通して鮮やかに形象化されていないだろうか。

「暗い絵」に典型的なように、「戦後文学」は重厚かつ真剣な主題を追求したものとしてみなされてきた。しかし、一方で戦後の文学空間には、遊戯的なものの文学的価値を主張する流れも存在していた。たとえば、「新戯作派」と通称される作家のなかに、将棋に仮託しながら自らの文学観を展開する者がいたことは興味深い。戦後の理念を体現したとみなされている『近代文学』同人の一人、本多秋五は、社会変革のために邁進した青年期

の「われわれ」にとつて、「碁将棋は暇潰し」であつたと述べている（『小林秀雄論』）。戦前の無産階級新聞論から、戦後の「赤旗名人戦」「新人王戦」に至るまで、将棋と革命・ジャーナリズム・文学の関係は複雑な問題を孕んでいたといえる。

本発表の目的は、「将棋」という観点から、遊戯的なものが文学的なものとして価値づけられる有り様を、戦後数年間の文芸批評の動向と照らし合わせながら考察することにある。戦後の諸テーマはひとつの紋切型を形成したようにも思えるが、本多秋五自身がのちに述懐するように、『近代文学』同人が提出した「芸術至上主義」や「近代文学」などのキーワードは「反語であり」、あるいは「反語のまた反語」でもあつた（「反語的な意図」）。こうした幾重にも屈曲した言説実践は、将棋と文学という問題と併走しながら、戦後の文芸批評の特質を形作ったのではないか。以上の問題関心から、「遊戯」と「反語」の関係をを通して、戦後の文学評価に関わる論脈の形成過程をみていきたい。

朝吹真理子さんに聞く

——盤上の理をめぐつて

朝吹 真理子

（聞き手）小谷 瑛輔

中野 綾子

【略歴】

朝吹真理子（あさぶき・まりこ）一九八四年、東京生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了。専攻は、近世歌舞伎。二〇〇九年、第一作「流跡」を『新潮』に発表する。二〇一〇年に、同作で第二〇回 Bunkamuraドゥマゴ文学賞を最年少で受賞。二〇一一年には、「きことわ」で第一四四回芥川賞を受賞した。『新潮』に二〇一六年一月号より、新作「TIMELESS」を連載中。